



(第五十四回)

平野川の橋 (上)

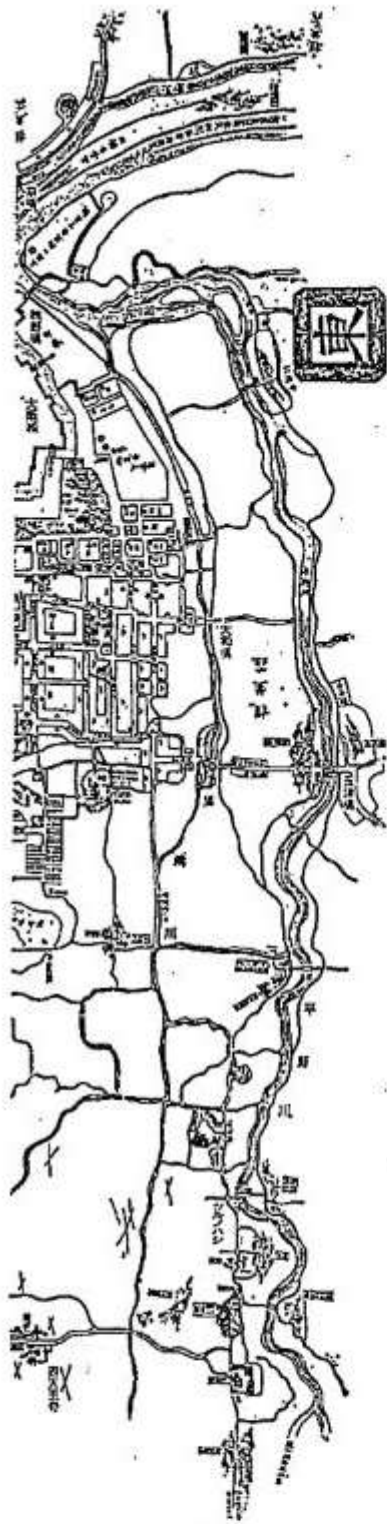
近藤和夫

(大阪市助役)

平野川の流れ

平野川は大和川を本流とする延長約十七・四^キの河川で、その水源を柏原市内とし、八尾市を經由した後、本市東南部をやや北西の方向に流れ城東区中浜で第二寝屋川に合流している。

平野川の本流である大和川が現在の流路となったのは、本稿第二十六回に紹介



全大阪州振正改修増 (文化3年—1806)

したように宝永元年(一七〇四)のこと
で、それまでは、石川と合流した付近から
長瀬川、楠根川などいくつかの支流に分
かれ、河内平野を流れていた。そして、
平野川もまた大和川から分流した一支流
であった。

古代、大阪の地形は、上町台地が北方
につきだし岬を形成し、現在の河内平野
一帯が大阪港の内海となっていたと考え

られている。内海は平野川などの諸河川
が運ぶ土砂の堆積でしだいに縮小してゆ
き、古墳時代には河内湖と呼ばれる湖を
形成していた。淀川や大和川の水が直接
海へ放流されずに河内湖に流入し、しか
も、その出口が数箇所に限られていたこ
とを考えると、河内平野一帯は長雨が続
いた時などは泥海になったことである
う。

古事記や日本書紀には、仁徳朝の時代
に大阪を中心に行われた土木事業に關す
る記述が多い。その一つに堀江の開削と
茨田堤の築造が挙げられる。堀江は現在
の大川にあたるのではないかと推察され
る。この開削によって河内湖からの流出
路が改良されたため、湖周辺が低湿地か
ら平野へと変革する大きな原因になった
と考えられる。また、これは耕地面積の
拡大に繋がり、ひいては古代王朝の経済
的基盤を固める要因にもなったと思われ
る。

その後、河内湖は深野池や新開池と呼
ばれる大きな池と平野川などの河川を残
してすべて陸地となったが、海への流出
口はあいかかわらず上町台地北端に限ら

れ、しかも、もともと低湿地であったた
め、河川の氾濫は多々発生した。

そのため、河内平野の治水は古くから
の悲願で、八世紀の和氣清麻呂の放水路
計画、十七世紀の河村瑞賢らの安治川開
削といった歴史的な治水事業が進められ
たが、必ずしも抜本的な解決にはなら
ず、宝永元年(一七〇四)の幕府による
大和川開削までの間、河内平野は幾度と
なく水害に苦しめられたと想像される。

平野川は自然流下のまま形成された河
川であるため自然堤防のままの、しかも
屈曲が激しい河川線形は、大和川開通後
は無難なこと、計画的な河川改修が実施
された大正末期から昭和初期に至るまで
変わらなかった。

明治中期から後期になると流域の市街
化が進み、平野川は農業用水路としての
効用だけではなく、家庭排水や工業排水
が流れ込む水路へと変わっていく。さら
に、河川の汚染が進むとともに、農地の
宅地化に伴う保水能力の低下などにより
新たな浸水被害が生じるようになり、こ
のため、耕地整理事業などによって河川
改修が実施されることになる。最も屈曲
の激しかった大池橋から丸一橋の間をス
ムーズな線形に改良するために、大正八
年発足した鶴橋耕地整理組合の手によっ
て、新平野川の開削が始められた。

その後、生野土地区画整理組合、平野
土地区画整理組合などが次々と設立さ
れ、新平野川の開削や改修が進められ
た。一方、大阪市も、平野川の改修や旧
河川敷の埋め立てなどを実施した。

これらの事業は昭和十五年にはほぼ完



「つるのはし跡」碑と鶴之橋の親柱

元禄期に編集された「摂陽群談」には平野川に架かる橋として、猪甘津の橋、

前述したように、古代の平野川には猪甘津の橋が架けられていたとも考えられるが、歴史的資料に橋の存在が明確に現れてくるのは江戸時代中期になってからである。

旧街道筋の橋

また、生野区桃谷には鶴之橋の親柱もある。この橋は日本書紀に記された猪甘津の橋ともいわれるもので、現在この地には旧橋の親柱とともに地元の手で建てられた「つるのはし跡」の碑が置かれている。さらに、東成区玉津二丁目の街角には亀之橋の親柱がひっそりと建っている。

了し、平野川の流路は現在のものに近くなった。旧平野川の埋め立てられた部分は宅地と道路になっている。現在でも御勝山古墳から近鉄線にかけて、その曲がりくねった道筋から昔の流路をしのぶことができる。そして、旧平野川に架かっていた柳橋、榎木橋の親柱が北鶴橋小学校近くの道端に残されている。



旧亀之橋親柱

暗越奈良街道は、高麗橋東詰を起点とし、東横堀川沿いを南下した後、安堂寺橋付近で東に折れ、そのまま直進し平野川に架かる玉津橋を渡る。そして、現在の東成区大今里三、四丁目付近を東南へ大きく湾曲しながら進み国道三〇八号に達する。玉津橋から大今里にかけては、旧水路の堤防上を進んだと思われる。現

鶴が橋、岡村の橋、中道の橋、中間の橋の五橋があげられ、このうち、猪甘津の橋と鶴が橋は同じ橋であるとしている。岡村の橋は俊徳街道、中道の橋は暗越奈良街道に架けられた橋と考えられるが、これらの橋名は固有の名称ではなく、単に、架橋地の地名を言い表わしたものにすぎないようで、江戸時代のほとんどの地図には橋の名前が記入されていない。しかし、時代を経て江戸後期になると、中道の玉津橋や猪飼野の鶴之橋など地図の上にも橋名が現われるようになり、橋の名前が固定していったと考えられる。古くから大阪の中心部から中河内を経て奈良・大和へ通じる主要な道として、暗越奈良街道、俊徳街道、奈良街道があった。

在でも街道筋の地盤は周辺より若干高く、付近の建物にも昔のものが多く残り、旧街道の面影をとどめている。後になって玉造が大阪側の起点となった。同地にはつる屋、ます屋の二軒の茶屋があり、旅人はここで当時名物であった深江の菅笠を買い求めたり、見送りの人々と別れを惜しんだという。

昭和五十二年、大阪市ではそれを顕彰して「二軒茶屋跡」の石碑を建てた。また、もと猪飼川に架かっていた黒門橋を顕彰する石碑も同じ場所にある。この碑によれば、黒門橋は宝永八年(一七二一)に架けられ、大阪で初めての石橋であったという。玉津橋は古くは中道の橋と呼ばれたことはすでに述べたが、玉津橋という名は享保十九年(一七三四)編集の「摂津誌」にすでに登場することから、この川筋の橋の中では比較的早く名前が固定した橋である。

俊徳街道は四天王寺南大門前からほぼまっすぐ東進し、舍利塚勝寺近くから湾曲しながら北折し、御勝山古墳の東側で旧平野川を渡る。この橋は古くは岡村の橋または小路の橋と呼ばれ、後には百済橋と名付けられた。街道の名前は福曲や浄瑠璃で有名な俊徳丸の物語に由来すると言われている。俊徳街道には翠橋という橋が今はない西之川に架けられていた。中川村に生まれた住吉家太郎右衛門(狹翠岩)が架設した十一橋の橋のうちの一つとされ、元文五年(一七四一)に架けられたと記録されている。

奈良街道はほぼ現在の国道二十五号に当たり、浪速区東美須町の交差点を起点

に河堀口、平野郷を通り奈良県王寺町へ通じる街道で、平野道とも呼ばれた。街道が平野川を渡る橋は百済橋で、江戸時代の頃にはすでに橋は存在したと考えられるが、いつごろから百済橋と呼ばれるようになったかは定かではない。

明治時代に入ってしばらくは平野川流域には大きな変化はなく田園地帯が広がっていた。橋は鉄橋化されることもなく、木橋や石橋のままであった。当時の記録のうち、明治十四年の大阪府の統計によると、玉津橋が橋長十二間五分、幅員一間五分、掘尻橋がそれぞれ十七間五分、二間と記録され、明治三十六年の大阪府誌では掘尻橋が橋長八十二尺、幅員九尺、百済橋が橋長三十六尺、幅員十六尺、玉津橋が橋長六十九尺、幅員十一尺となっており、石橋の百済橋を除いてすべて木橋であった。これらの橋は府費をあてて管理されていた。他にも多くの橋が架けられていたと考えられるが、これは地元負担で管理されていたため資料に記載されていないのであろう。

大正十一年発行の東成郡誌では前述の鶴之橋、亀之橋など多くの橋の記載が見られる。それによると生野村では生野橋(大正三年)、生野田島橋、鶴橋村では鶴之橋、亀之橋、百済橋、中本町では玉津橋(橋長十一間四尺、幅員二間一尺)、中本橋、日吉橋、衛門橋、中島橋、平野郷町では百済橋(橋長六間、幅員三間、明治十六年完成、石橋)、掘尻橋、餘慶橋、積善橋、両国橋、北百済村では今橋などの記録が見られ、現在存在する橋名が多くなってくる。



(第五十五回)

平野川の橋 (下)

近藤 和夫

(元大阪市助役)

橋の近代化

明治三十年及び大正十四年の市域拡張と、周辺地域の開発に伴い、都市計画道路の整備が周辺部にも伸びるようになり、平野川筋の橋についても幅員の広い永久橋が架けられるようになる。

第一次都市計画事業は本稿で再々紹介しているが、平野川についてもこの事業で廻橋、大池橋、丸一橋の三橋が架け換えまたは新設された。

このうち泉尾今里線の廻橋はその中で最も早く大正十五年に新設された。橋長十九・〇㍎、幅員二十一・八㍎をもつ鉄筋コンクリートの三径間ラーメン橋である。第一次都市計画事業誌によれば、その当時まだ存続していた旧平野川にも南

玉津橋という橋が同じ路線に架けられている。この橋は橋長十一・六㍎、幅員二十一・八㍎の規模をもつ単径間の鋼桁橋であった。

大池橋は昭和九年に完成した橋長十八・三㍎、幅員二十一・八㍎の規模をもつ橋梁である。上部構造は三径間の単純鋼桁橋であるが、下部構造は橋台と橋脚が底面でつながり、U字型の一体構造となっている。

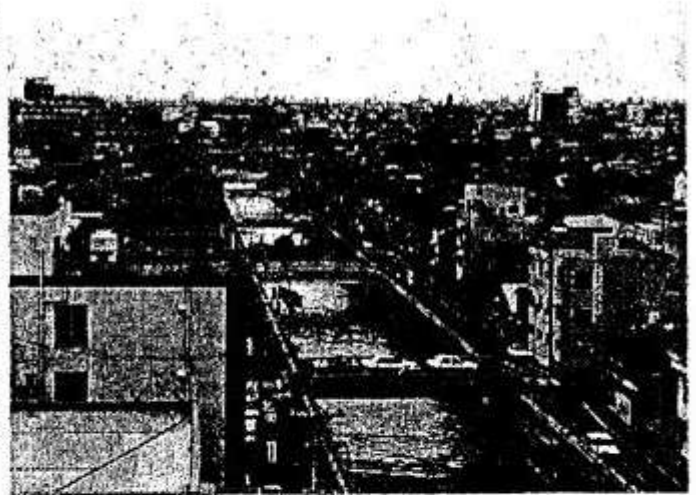
この橋では最近、補強工事を機に高欄が美しく化粧直しされた。

丸一橋は昭和十年に完成し、橋長十八・〇㍎、幅員二十七・三㍎の通称堀式と言われる突桁式鋼桁橋である。この形式は河川内のみ橋台の基礎を設けるため道路敷にかかる工事範囲を小さくできる

利点があり、この頃、市内の堀川の橋梁に多く採用された。

その他、中本橋が昭和二年に、衛門橋が昭和四年にともに幅員五㍎の三径間鋼桁橋になった。また、生野橋は昭和十二年に橋長十五・八㍎、幅員七・〇㍎の単径間の鋼桁橋になったが、下路式で鋼桁がかまぼこの形をした当時としては珍しいものであった。そして、日吉橋、入船橋、千歳橋、耕整橋の四橋が昭和十年前後に口型の橋台をもつ鋼桁橋になった。

一方、平野川の通水能力の向上を図るため平野川分水路（開削当初は城東運河）は昭和三年に内閣の許可を得た総合大阪都市計画として開削が実施されるこ



平野川には多くの橋が（眼鏡橋付近）

とになり、昭和四年から大阪市と土地画整理組合の手で開削が進められ、昭和十四年に一応の完了をみた。しかし、排水や水運に不都合な所もあったため、その後も改修工事が進められていたが、戦争によって事業は中断し、完成は戦後にもちこされた。

戦後になり、開削工事は少しずつ続けられていたが、周辺の市街化に伴って、浸水被害が生じるようになり、事業推進を望む声が高まってきた。そこで、昭和二十四年度から本格的に事業が再開され、昭和三十八年度に完成した。

平野川分水路には、開削と相前後して平野川との分派点に架かる馬場先橋から新しく開削された第二寝屋川口に架かる天王田大橋までの約五・八㍎の間に、五十四橋もの橋が、昭和三十年から四十年代前半にかけて相次いで架けられた。その形式は鋼橋が二十橋、コンクリート橋が十七橋、他は木橋であり、ほとんどが二径間の桁橋であった。

河川改修に伴う橋の架換

平野川流域は前述したようにもともと地盤が低いうえ、低湿地であることから浸水被害のおきやすい地域である。しかも、戦後の都市化に伴って宅地開発が急激に行われた結果、雨水の地下浸透能力や保水能力の低下を生じ、短期間の強降

雨による浸水被害が多発するようになった。そのため、昭和三十九年度から河幅が狭小な平野川上流部を中心に河川改修事業が行われてきたが、昭和四十七年に発生した二度にわたる浸水被害を契機に事業が強力に実施されることになった。

また、その時期に相前後し、寝屋川水系の全体計画の見直しも図られ、その結果、平野川下流部と平野川分水路において約二割の河床掘削と護岸嵩上げを基本とする河川改修工事が実施されることになった。そして、それと同時に橋台の補強、低い橋の嵩上げ、河川内橋脚の撤去を主な目的として両河川に架かる橋の架け換えが実施されることになった。

架換事業は昭和四十七年度から始まったが、その当時両河川には百十橋もの橋が架けられていた。しかし、これらの橋のうち、治水対策上から最終的には八十五橋が事業化された。工事は、木橋や老朽化が進んでいるものなど治水上緊急度の高い橋から順次実施され、現在では、架換工事中の数橋を除いて概ね完了している。

大阪人
平野川水系の橋は一部の橋を除いてほとんどが市民生活を支える生活道路に架かっており、また、橋周辺の道路敷に余裕が少なく工事用スペースの確保が困難な所が多い。

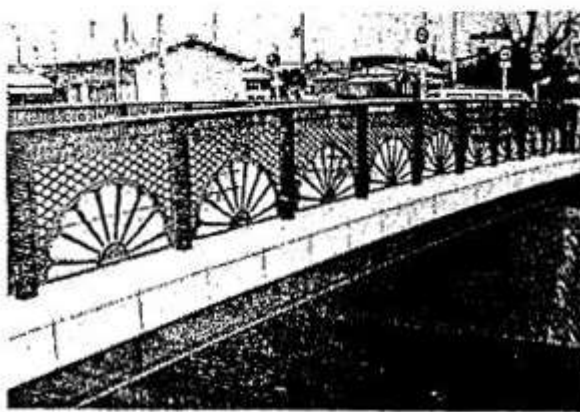
15
このような厳しい制約の中で、耐震対策など所定の設計基準を満足する橋を架けるために、設計・施工上さまざまな工

夫が図られてきたが、今日、その概成を迎えられたのも沿道住民の多大な御協力のおかげであると深く感謝している。

歴史の橋整備

大阪市では現在「歴史の橋」整備として、橋の架け換えや補修時にタイミングをあわせて、橋そのものやその周辺の歴史を主題にして、橋の高欄や舗装などをデザインし、市民に橋やその周辺の歴史を身近なものとして理解してもらおうとともに、美しい街づくり役に役立つよう橋梁の美装化対策を実施している。

昭和五十九年架け換えられた平野川水系の今川に架かる橋原橋、緑橋がその第一号となった。橋原橋は橋長二十、幅員四、歩道の歩道橋であるが、橋名は延喜式内社である橋原神社に由来する。

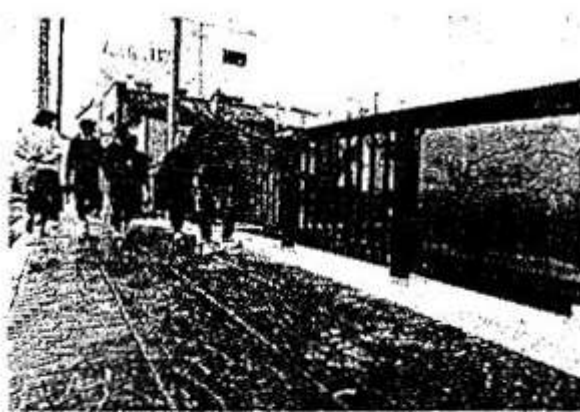


橋原橋

周辺地域は古代には百済郡と称され、大蔵からの先進的な文化がもたらされた所といわれている。そして、「百済」の名は現在でも駅名や学校名に残されている。そこで橋原橋では高欄に百済瓦の文様を模したデザインを採用している。

その他、橋上にベンチを兼ねた植樹樹を置き、舗装面もタイルで修景している。同時に架け換えた緑橋の高欄についても同様に百済瓦の文様を二十、程度程度の金物に鋳込み配置した。

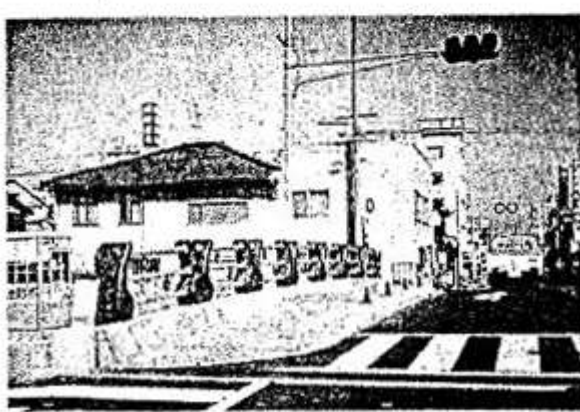
玉津橋では、暗越奈良街道筋にあたることから、高欄部に江戸時代に描かれた古地図を銅板に焼き付けたものをはめ込み、橋が古くから存続してきたことを顕彰している。また、現在でも街道筋の生駒山中暗峠に石畳が残ることから、橋の歩道部には石畳風の敷石を並べた。



玉津橋

さらに、最近架換工事が完成した平野川の猪飼野新橋では、橋名に「猪飼野」をもつことから、古代から開けたこの地を顕彰するため、親柱を古代の墳墓の代表的な形式である前方後円墳の形とし、高欄の柱には古代人の装身具の一つである勾玉の形を模したものを採用した。さらに、日本書紀の一節である「為橋於猪甘津、即身其処小橋也」の十四文字を鋳込んだ金物を高欄に配し、猪飼野の歴史がしのべるよう工夫している。

橋は大小様々である。経済社会を支えるうえから、幹線道路の橋の建設と維持に力が注がれるのは当然ではある。しかし、平野川水系に架かる橋のように、市民の日常生活に密接に関係する橋々についても、それらに増して愛情を注ぐことが必要であると常々考えている。



猪飼野新橋